『人家和歌集』を読む―

名護嵵河
由良木陽向
藤川功和

一、『人家和歌集』について

『人家和歌集』は、藤原行家撰と目される鎌倉時代中期成立の私撰集である(1)。行家は六条藤家の子孫、知家男として貞応二年（一二二三）に生まれる。藤原定家没後の歌壇において、父や真観とともに反御子左派として活動し、後に『続古今和歌集』の追加撰者の一人となった。家集は現存しないが、歌学書に『温故抄』がある。『続後撰和歌集』以下の勅撰集に八一首入集する。

『人家和歌集』は、巻八から巻一〇の三巻のみ現存し、それらにも錯簡、脱落等がみられる。早くは福田秀一氏によって成立時期の推定やその編纂態度、また、翻刻と錯乱の激しい本文の復元案が示され、各歌人の歌群配列が四季恋雑の順になっていることなどが指摘されている(2)。近年では、入集歌の注釈も歌人別になされつつあるが(3)、『人家和歌集』全体に及ぶものは未だ見えないようである。

尾道市立大学中世文藝研究会では、以前より後嵯峨院時代の和歌資料の作品分析を試みており、その一環として本年度は『人家和歌集』の輪読を行っている。研究会では二年前から『温故抄』の翻刻も進めており(4)、今後は『人家和歌集』の注釈から得られた知見と併せて、後嵯峨院歌壇について考究してゆきたい。

そこで本稿では、巻八巻頭の前大僧正公豪の和歌九首

の注釈を試みる。各歌は、一～三番歌―由良木、四～六番歌―名護、七～九番歌―藤川が担当した。（由良木）

二、『人家和歌集』概観

巻八から巻十までの残欠本ではあるが、『人家和歌集』には、他書には見えない歌人とその詠が入集しており、和歌資料として貴重である。

試みに、『人家和歌集』の入集歌人と入集数を確認し(5)、成立時期が近接する行家の著作『温故抄』(6)における入集の有無と併せて通覧しよう（本稿末尾別表参照）。

例えば、巻八は、現存本文から特定乃至は推定可能な作者が三十五名で、この内『人家和歌集』成立段階で既に勅撰歌人であったのは十二名（『続古今和歌集』で勅撰集初入集は八名）。換言すれば、巻八入集歌人の約三分の二は、『人家和歌集』成立時、勅撰集へ入集せず、さらに、公宗・成宣・有海・禅兼・良性・守円・定勝・弁全らは、「新編国歌大観」や「私家集大成」によるかぎり、『人家和歌集』以外の諸歌集にその名が見えない歌人達なのである。

さらに巻九では、『人家和歌集』以外の諸歌集に見えない歌人は、勝秀・導也・資円・寛慶・道日・禅春・貞室・慈性・観存・巌性・了性・寂音・親道・源勝・猷貞・仲恵・良和・全教・本蓮・正蓮・教願・道妙の二十二名にのぼり、巻九全体の約半数を数える。

一方、『人家和歌集』入集歌人の内、『温故抄』にも例歌がとられている歌人は、三巻併せても五名（澄覚・尊海・実伊・公朝・鷹司院帥）と僅かである。『温故抄』の例歌は、行家が抄出した三代集歌を本歌とする詠に限られることから、両書における入集歌の重複は、例え『人家和歌集』が完本であったとしてもそれほど多くはなかったであろう。ここでは重なりの見られた例として、鷹司院帥の一首をあげる(7)。

◇『人家和歌集』四二六

鷹司院帥卅五首

（中略）

郭公を

時鳥つらさ忘るるひとこゑにまたれし程のうきはものかは

郭公涙をからばことはむかかるたぐひの袖はありやと

◇『温故抄』上巻・二九三～二九六

（例歌番号二〇九～二一一）

読人しらす

へ聲はしてなみたはみえぬ郭公わか衣手のひつをからなん

百首歌たてまつりしに　　式子内親王

新古こゑはして雲路にむせふほとゝきす涙やそゝくよひの村雨

建保三年九月十三夜内大臣家百首杜郭公　　定家卿

時鳥こゑあらはるゝころもてのもりのしつくをなみたにやかる

文永六年五月百首に夏

時鳥なみたをからはことゝはんかゝるたくひの袖はありやと

重複歌は、行家が採歌した三十五首（現存本文では五首が欠脱）の内、時鳥を詠じた一首で、『温故抄』では、『古今和歌集』夏歌・一四九番・不知読人歌の例歌として、式子内親王、定家とともに配歌される。

『温故抄』の記載から、行家が当該帥詠を前引『古今和歌集』歌を本歌取りした詠と認定していることが伺えるとともに、詞書から当該歌が文永六年（一二六九）五月の百首歌の一首であることも知られる。

『温故抄』と同じ「文永六年五月百首」の詞書は、宗尊親王が鎌倉将軍を廃され帰京後に撰した『竹風和歌抄』収載の百首歌からの抄出歌群巻頭に見える。

当該百首歌については、近年刊行された同書の注釈書に「宗尊二十八歳の五月に詠じた百首歌。本抄に、春13首（694～706）、夏7首（707～713）、秋13首（714～726）・冬8首（727～734）、恋8首（735～742）、雑19首（743～761）の、計68首が現存。元来は、春20（首）・夏10・秋20・冬10・恋20・雑20か」と見え(8)、本文を通覧すると、以下の如く帰洛後の宗尊の憂愁を滲ませる詠が、述懐題詠以外にも散見する。

文永六年五月百首歌

春

あはれにもむかしにかはる子日して昨日の野べとたれしのびけん　（春・六九四）

とへかしな柳の門は跡たえてはれぬながめのはるのあしたを　（同・六九九）

ほととぎすうきにかたらふ声ならば物思ふ宿を過ぎがてになけ　（夏・七〇八）

いとはるる世につれなくてふる物は五月の雨とわれとなりけり　（同・七一一）

かなしさはむかしよりともなぐさまずわが身ひとつの秋の夕暮　（秋・七一七）

とへかしな物思ふやどの神無月わがみ時雨のそではいかにと　（冬・七二九）

夙に知られる如く、鷹司院帥は、宗尊の将軍在職中に鎌倉で歌道師範をつとめた真観の息女であり、宗尊が帰洛後に催した百首歌に出詠した可能性は十分に考えられよう(9)。

＊　＊　＊　＊　＊

以上、行家撰とされる『人家和歌集』を、周辺の歌書も交えながら少しく辿った。僅か三巻しか現存しないが、他書に見えない当代歌人の詠を多く収め(10)、また他書との併読により、今回確認した鷹司院帥のように、後嵯峨院歌壇の勅撰歌人の和歌事績を補うことも期待される。今後も注釈作業を進めながら、さらに考察を深めてゆきたい。

〔注〕

(1) 近年では、文永八年（一二七一）以後、行家が没した文永一二年（一二七五）正月以前の成立と指摘される。『和歌文学大辞典』（平成26年　古典ライブラリー）参照。

(2) 『中世和歌史の研究』（昭和47年　角川書店）第二編第二章Ⅱ、「人家和歌集（解説・錯簡考と翻刻）」（『国文学研究資料館紀要』第7号、昭和56年3月）。

(3) 中川博夫氏「大僧正隆弁の和歌注解」（『鶴見日本文学』第一八号、平成26年3月）、「僧正公朝の和歌注釈稿（一）」（『鶴見日本文学』第一九号、平成27年3月）等。

(4) 尼崎こころ・財津奈々・藤川功和「翻刻『温故抄』（上）」（『尾道市立大学芸術文化学部紀要』18号、令和元年3月）、「翻刻『温故抄』（中）」（『尾道市立大学芸術文化学部紀要』19号、令和2年3月）。

(5) 各歌人の配列及び入集歌数や推定入集歌人については、福田氏前掲（2）論文及び「新編国歌大観」参照。

(6) 『和歌文学大辞典』『温故抄』の項で、池尾和也氏は「文永三1266年頃に成立した第一次成立本にその後入手した資料を若干増補して同八年七月七日挙行の『白川殿探題百首』以後、同年一〇月一三日の行家の任左京大夫以前に成立。但し、その作者名表記の様態からは編集が草稿段階のままストップした可能性も示唆される」と記述する。

(7) 『温故抄』本文は、前掲（4）論文に拠った。

(8) 中川博夫氏『竹風和歌抄新注』下（令和元年　青簡社）。

(9) 例えば、同年四月には宗尊が催し、真観・行家らも詠出した「柿本影前百首」がみえる。佐々木孝浩氏「六条藤家から九条家へ―人磨影と大嘗会和歌―」（『藝文研究』昭和63年7月）。

(10) 井上宗雄氏は「ほぼ現存歌人に限って、歌人別に撰んだ集ではないか」と指摘する。『鎌倉時代歌人伝の研究』（平成9年　風間書房）第一章三藤原行家の生涯参照。

（藤川）

三、『人家和歌集』を読む―巻八巻頭公豪詠―

凡例

一、本文は、肥前松平文庫本に拠った。
一、大倉精神研究所本（『新編国歌大観』の底本）を以て校合し、校異があった場合は（国）とつけた。
一、適宜濁点などを施し、字体は現行の活字体に改めた。
一、本文中、校異を示した箇所には本文右傍に傍線と、A、B・・・のアルファベットを付した。
一、本文中、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②・・・の通し番号を付した。
一、その他の引用本文は、原則として『新編国歌大観』、『私家集大成』に拠り、それ以外は適宜底本を示した。なお引用本文には、傍線、振り仮名などを付した。

〔翻刻本文〕

人家和歌集巻第八

前大僧正公豪九首

前左大臣家の十首歌に帰雁

かりがねは秋と契て帰らん老のいのちをいかゞたのまむ

郭公を

老がよにかたらひつくせ郭公ふるき昔をしのびねならば

蛍

あつめをく窓の蛍よ今よりは衣の玉のひかりともなれ

閑居秋風

宮こ人とはぬ恨みも今さらに身にしむ許秋風ぞ吹

閏九月尽

此秋は日かずをそへてなが月の今日を再び惜みつる哉

題不知

なか〳〵にぬるがうちにやみずもあらむうつゝの夢はさむるよもなし

暁夢

よはり行老のねざめの暁はみるとしもなき夢ぞはかなき

懐旧

なゝそぢにあまりうき身のこしかたを思ひいづるもひとむかし哉

身のゝぞみかなひてかしこまり申侍りけるついでにかく許うきことときかぬみよなればいはほの中にすむ人もなし

〔注釈〕

一首目

前大僧正公豪九首①

前左大臣家の十首歌に帰雁②③

かり④がねは秋と契て帰[A]らん老のいのちを⑤いかゞたのまむ

【他書所伝】

『続拾遺和歌集』雑春歌・四八四

帰雁を　　天台座主公豪

かりがねは秋と契りてか[A]へるとも老の命をいかがたのまぬ

『題林愚抄』春部四・一二〇三

続拾　　天台座主公豪

かり金は秋とちぎりてか[A]へるとも老の命をいかがたのまん

【校異】

A　帰らん―かへるとも（続拾遺）（題林愚）

【語釈】

①前大僧正公豪―三条左大臣藤原実房男。建久七年（一一九六）八月生。明禅法印の弟子。法勝寺別当などを経て、弘安元年四月一日、八三歳で第八九代天台座主に任ぜられる（『天台座主記』）。『続古今和歌集』以下の勅撰集に一〇首入集。

②前左大臣家の十首歌―前左大臣は山階実雄のことか。実雄は建保五年（一二一七）生で西園寺公経男。後嵯峨院歌壇で活躍し、自らも歌会を催している。『続後撰和歌集』以下の勅撰集に八二首入集。『大納言為家集』に「きぬ〳〵のときしもあれや誰かたに衣かりかね鳴てきつらん」（秋・七〇三・「暁雁　同七年（文永）八月十八日前左大臣家十首、月次初度」）、「身をかくすかけさへあれて嵐山木の葉をかへす秋の暮方」（秋・七五三・「山家暮秋　文永七年潤九月尽日前左大臣家月次十首」）等が見える。

③帰雁―春になり北国へ帰っていく雁。早くは「はるがすみたつを見すててゆくかりは花なきさとにすみやならへる」（『古今和歌集』春歌上・三一・「帰雁をよめる」・伊勢）等と見える。漢詩では漢の武帝が「秋風辞」で帰雁と老をともに詠み込んだ例が見える。

④かりがね―雁の鳴き声、もしくは雁そのもの意で用いられる。

⑤いかゞたのまむ―不確かな自分の命を必ず秋に来る雁に託そうとするも、自分の命はゆだねる術がないと詠じる。「いかにせんまたこむまてのいのちたにたのまれぬよにかへるかりかね」（『柳葉和歌集』三〇二・「帰雁」）などは類例。

【通釈】

前左大臣家の十首歌で帰雁（を詠む）

雁は秋と約束して帰るようだ。この私の老いてゆく命をどのようにゆだねようか、いやゆだねられない。

二首目

郭[A]公を

老がよにかたらひつくせ郭公ふるき昔をしのびねならば[2]

【校異】

A　郭公を―郭公（国）

【語釈】

①郭公―『万葉集』の時代からその声を賞美され、夏歌に多く詠まれる。当該歌では「おいがよの思ひいでかなほととぎすまつにほどへぬさ夜のはつ声」（『正治初度百首』夏・一八二六・実房）のように、昔を語りつくしてくれるものとして詠まれ、長寿故に昔を語り合う相手がいなくなってしまったことを暗に示す。

②しのびね―声をひそめるような郭公の啼き声。ここでは昔をしのぶ意をかける。「橘の香をとめきては郭公なれもむかしやしのび音になく」（正治二年『石清水若宮歌合』郭公・廿一番左・一〇七・伊綱）

【通釈】

郭公を（詠む）

年を取って生きているこの世に語りつくしてくれ、郭公よ。古い昔をしのんでひっそりとした声であるならば。

三首目

蛍

あつめをく窓の蛍よ今よりは衣[2]の玉のひかりともなれ[1]

【他書所伝】

『続拾遺和歌集』釈教歌・一三五〇

（五百弟子品）　天台座主公豪

あつめおく窓の蛍よ今よりは衣の玉のひかりともなれ

【語釈】

①あつめおく窓の蛍―晋の車胤が、蛍を集めて袋につめ、その光で勉学に励んだという蛍雪の故事を踏まえた表現。ここではその勉学にいそしんだ証である蛍の光が「衣の玉」のように自らを仏性に目覚めさせるものとなることを願っている。「心あらばまどのほたるも身をてらせあつむる人のかずならずとも」（『風雅和歌集』雑歌上・一五二六・「（題しらず）」・光吉）。

②衣の玉―法華経・五百弟子品に説かれる喩え。自分の服の裏に縫い付けられた珠に気付かずに貧しい暮らしをしていた人が、友人からその珠の存在を知らされ歓喜したことから、自分に本来備わっている仏性に仏の教えによって気づくことをいう。「かけおきしころものうらのたまをえていはねにときて光をぞまつ」（『明恵上人集』一二三・「元仁二年正月十三日、浄定院法印行寛縄床樹の詠どもに御返まうされたりけるにや、その返報につけて」）など釈教歌の類例が多く見える。

【通釈】

蛍（を詠む）

集めて置く窓に光る蛍よ。今からは衣の玉の光とも

なって（私を仏性に目覚めさせて）くれ。

四首目

閑居秋風[1]
宮こ人[2]とはぬ恨み[3]も今さらに身にしむ許秋風ぞ吹

【語釈】

①閑居秋風―閑居は世俗を離れて心静かに暮らす事、またその住居を指す。秋風は人事詠においては、人恋しさや恨みを象徴する。「人め見ぬ老のすみかの松かけにをとつれとては秋風そ吹」（『大納言為家集』秋・五四八・「閑居秋風」同七年八月十八日前左大臣家十首、月次初度」）は近い例。

②みやこびと―都に住む人、また都を離れて住む人が都に残る人々を指して言う。都人の訪れを詠んだ例は、中世以降多く見える。「宮こ人とはぬもいかがうらむべき雲にわけいるやどのかよひ路」（『正治初度百首』山家一二八九・隆信）、「宮こ人とはて月日はすきの庵軒になれたる嶺の松かせ」（『千五百番歌合』雑・千三百九十七番左・二七九二・後鳥羽院）など。

③とはぬ恨みも―秋風の冷たさは勿論のこと、人の訪れのない悲しみまでも痛切に感じるということ。「いまさらにとはるべしともおもはねばうらみもつもるにはのしらゆき」（『荒木田永元集』六八・「ゆきのあしたに申しつかはし侍りし」）。

【通釈】

閑居秋風

都の人が、尋ねてくれない悲しみも、今は一層身に感じ入る程に秋風が吹いている。

五首目

閏[1]九月尽
此秋はひ[2]かずをそへてなが月の今日[3]を再び惜みつる哉

【語釈】

①閏九月尽―歌題としては、『為忠家初度百首』に「ながが月のひかずをそふることしさへあかでもあきのをしまるるかな」（秋・四三四・「閏九月尽」）などの例が見える。

②ひかずをそへてなが月の―「なが月」には、閏月により秋が長くなった意と、九月の異称の「長月」が掛かる。「つねならはけふやかきりの神無月なをなか月のおしき秋かな」（『範宗集』秋・二七八・「閏九月尽」）。

③今日を再び惜しみつる哉―九月の尽日を惜しんだ上、更に閏九月の尽日までも惜しむ。「さのみやはおしみとめたる秋そとて又長月のくれをなけかん」（『大納言為家集』秋・七六三「潤九月尽」同年潤九月尽日前左大臣家月次十首」）。

【通釈】

閏九月尽

今年の秋は日数が増して長かったけれど、その九月の（末日の）今日を再び名残惜しく思ってしまったのだよ。

六首目

題不知

なか①くにぬるがうちにやみず②もあらむうつつ③の夢はさむる④よもなし

【語釈】

①なかくに―どっちつかずで中途半端な様子を言う。なまじっか。「花さかぬ宿の梢に中々に春となつげそうぐひすのこゑ」（『長秋詠藻』一〇五）。

②みずもあらむ―「見ずもあらず」では「見もせぬ人のこひしくはあやなくけふやながめくらさむ」（『古今和歌集』恋歌一・四七六・業平）をはじめ、散見するが、「みずもあらむ」では公豪が早い例。公豪以後では「見しやたれ見ざらん誰かみずもあらんみもせぬ人のみぬもみぬかは」（『後水尾院御集』九八七）が見える。

③うつつの夢―夢ではないかと思われるような、はかない現実。「さぞなげく恋をするがのうつの山うつつの夢の又しみえねば」（『拾遺愚草』下・恋・二六五三）、「なにとあるうつゝの夢そぬるか内におなし昔のことも みゆるに」（『竹風和歌抄』文永六年八月百首歌・雑・八二四）。

④さむるよもなし―「覚む」は夢や眠りから覚める意の他、迷いから脱するなどの意を持つ。「よ」は、「夜」に「世」がかけられている。「うかりける夢の契の身をさらでさむるよもなきなげきのみする」（『建礼門院右京大夫集』三三〇）。

【通釈】

題知らず

なまじっか寝ている間に見ないこともあるだろうか。（夢は覚めるけれども）うつつの夢（夢のような儚い現実の迷い）は覚める夜もない。

七首目

暁①夢

よはり行老②のねざめの暁③はみるとしもなき夢④ぞはかなき

【語釈】

①暁夢―同題詠の近例として、「見もわかぬ夢もうつゝもかなしきは老のねふりのあかつきの空」（『為家卿集』建長五年・四八〇）が見える。

②老のねざめ―老人が目を覚ましがちになり、熟睡できない様子。「老眠早覚常残夜（おいのねぶりはやくさめてつねによをのこす）病力先衰不待年（やまひのちから

まづおとろへてとしをまたず）」（『和漢朗詠集』下・老人・白居易）。

③暁―夜が明けようとしてまだ暗い頃。『万葉集』では「あかとき」と訓む。老の寝覚めとの組合わせとしては、「いでやこのしぐれおとせぬあかつきも老のねざめはそでやぬらさぬ」（『続古今和歌集』冬歌・五七八・「暁更時雨を」・俊恵）、「哀にもかならずおいのね覚とてあかつきふかき夢ぞのこれる」（『道助法親王家五十首』雑・「（暁述懐）」・九八二）などの先行例が見える。

④みるとしもなき―はっきりと見るということもない。

⑤夢ぞはかなき―本来的に頼りない夢が、浅い眠りの中で見たためにいやまさにはっきりしないと詠じる。「夢のごとはかなき物はなかりけりなにとて人にあふとみつらん」（『後撰和歌集』恋三・七六五・「題しらず」・源頼）。

【通釈】

暁の夢

衰え行く老身ゆえ目が覚めてしまう暁は、はっきり見るということもない夢が本当にはかないものだ。

八首目

懐旧

なゝそぢにあまりうき身のこしかたを思ひいづるもひとむかし哉

【語釈】

①懐旧―昔を思い出し懐かしむこと。『和漢朗詠集』下に「懐旧」の立項が見える。歌題としては、『堀河百首』以後定着する。

②なゝそぢにあまりうき身―七十歳を過ぎた詠者自身をさす。「あまり」は「なゝそぢにあまり」と「あまりうき身」の両様に掛かる。生年が建久七年（一一九六）であれば（『東寺長者補任』）、『人家和歌集』成立の上限と目される文永八年（一二七一）時点で七十六歳。参考「おもふことまちよわりゆく七十のあまりかなしきとしのくれかな」（『続拾遺和歌集』雑秋歌・六六一・「前大納言為家家に百首歌よみ侍りける時」・家隆）、「ななそぢにあまりかなしきながめかないるかたちかき山のはの月」（『玉葉和歌集』秋歌下・七〇四・「寛元元年九月十三夜月十首歌の中に」・公経）。

③一昔―昔として感じられるほどの過去。当該歌では「遥か昔」をあらわすか。「よしの山ほきぢづたひにたづね入りて花見しはるはひとむかしかも」（『山家集』九六・「山寺の花、さかりなりけるに、昔を思ひ出でて」）。

【通釈】

懐旧（の心を詠む）

七十歳を過ぎたつらい我が身の今まで過ごした時間を思い出すも、はるか昔の出来事のようだよ。

九首目

身の①ゝぞみかなひてか②しこまり申侍りけるついでに
かく③許うきことときかぬ④みよなれば⑤いはほの中にすむ人
もなし

【本歌】

『古今和歌集』九五二・（「題しらず」）

いかならむ巌の中にすまばかは世のうき事のきこえこざらむ

①身のゝぞみ―詠者自身の望み。「見ればまづいとど涙ぞもろかづらいかに契りてかけはなれけむ」（『新古今和歌集』雑歌下・一七七八・「身ののぞみかなひ侍らで、やしろのまじらひもせで、こもりゐて侍りけるに、葵をみてよめる」・鴨長明）。

②かしこまり申―貴人に対して恐れながら申し上げる。詠歌内容から治世者に対してのものと思われる。

③かく許―これほどまで。

④みよ―天皇の治世。

⑤いはほの中にすむ人もなし―本歌を反転した表現。「巌」については、【本歌】引用の『古今和歌集』の注釈に、「『法句譬喩経』（無常品）に、死を遁れるために須弥山（仏教で世界の中心にあるという高山）に隠れたが、死はそこまで追ってきたという説話がある（契沖による）。この歌の「巌」はそれをさすものか」（小学館「新編日本古典文学全集」当該歌脚注）との指摘が見える。

【通釈】

我が身の願いが叶って（御礼を）恐れながら申し上げました時に

このように（この度私の望みが叶ったように）この世が厭わしいということを耳にしない治世ですので、（古歌のように、世を遁れて）巌の中に住む人もいません。

【『人家和歌集』各巻入集歌人一覧　付『温故抄』への採歌の有無】

＊入集歌数下の○数字は『続古今和歌集』入集数を示し、□囲いは、同集で勅撰集初入集であることを示す。また、網掛けは、他書所伝によって特定し得る作者を示し、入集歌数が白抜きのものは、和歌の欠脱が存することを示す。

巻八 歌人35名	温故
公豪 9 ①	×
道慶 2 ①	×
隆弁 17 ④	×
道勝 3	×
澄覚 **15** ⑤	○
定済 3	×
道玄 8 ①	×
聖兼 6	×
尊海 15 ②	○
尊家 2 ①	×

巻九 歌人51名	温故
円空 2	×
禅空 5	×
心海 6 ①	×
円嘉 4	×
勝秀 3	×
心円 9 ①	×
導也 2	×
志遠 10	×
資円 2	×
寛慶 2	×

巻十 歌人19名	温故
式乾門院御匣 22 ⑧	×
後鳥羽院二条 **?**	×
安嘉門院高倉 3 ②	×
今出川近衛 **13**	×
経朝女 3	×
範時女 3	×
藻璧門院少将 16 ⑪	×
安喜門院大弐 3 ①	×
安嘉門院右衛門佐 8 ③	×
新院弁内侍 **11** ⑥	×

巻八	温故
公宗2	×
実伊18④	○
良覚10②	×
定円?③	×
道雲3	×
憲実?①	×
公朝28	○
成宣1	×
教範1	×
源全7	×
覚基3	×
有海2	×
源承3	×
禅兼3	×
弁算2	×
円勇15①	×
聖勝1	×
円範2	×
良性2	×
兼済1	×
守円2	×
定勝3	×
全家3	×
隆範1	×
弁全2	×

巻九	温故
如円6	×
道日2	×
禅春1	×
順空1	×
貞室1	×
慈性3	×
観存2	×
厳性1	×
了性2	×
定意5	×
実承1	×
朝守2	×
円俊1	×
上海3	×
寂忍3	×
寂音2	×
唯教2	×
行然3	×
能慶2	×
寂恵5	×
親道3	×
静範6	×
源勝1	×
任弁1	×
仲恵3	×
玄覚4	×
宝遍2	×
猷貞2	×
良位2	×

巻十	温故
鷹司院帥35④	○
典侍親子?	×
室町院中納言2	×
皇后宮内侍3①	×
安嘉門院按察5	×
中務卿親王家小督?③	×
中務卿親王家播磨2	×
平親清女9②	×
平親清女妹7	×

巻九	温故
良和2	×
良心2	×
順真3	×
全教1	×
西円3	×
定宣2	×
本蓮3	×
慈願3	×
正蓮1	×
教願1	×
道意1	×
道妙1	×

〔付記〕

本稿は、令和二年度学長裁量教育研究費（研究課題「『温故抄』を起点とした六条藤家歌学の研究」）による研究成果の一部である。

—なご・りょうが　日本文学科二年生—
—ゆらき・ひなた　日本文学科三年生—
—ふじかわ・よしかず　日本文学科教授—